

## 東アジア地域統合の歴史的考察

研究代表者 大阪大学・大学院文学研究科・世界史講座 教授 秋田 茂  
共同研究者 大阪大学・大学院文学研究科・世界史講座 教授 桃木至朗  
大阪大学・大学院文学研究科・世界史講座 教授 竹中 亨  
大阪大学・大学院文学研究科・世界史講座 特任研究員 佐藤貴保

### 1. 研究の目的

21世紀におけるアジアでの日本の位置を考えるうえで、東アジアにおいてEU的な地域統合が可能かどうかは決定的に重要であり、「東アジア共同体」構想の是非が議論されるようになった。

本共同研究は、「広義の東アジア」地域(東南アジア、中央アジア、南アジアの一部を含む東ユーラシア)における地域統合を構想することが、現実的にどの程度可能なかを考えるため、東アジア世界がいかなる歴史の実体であるのかを解明することを目的とした。相互交流を通じた歴史的一体性のないところに、地域統合はありえないからである。

歴史的に見ると、東アジア地域は単一・均質の地域空間ではなく、複数の地域空間の複合からなっている。具体的に言えば、それは中央アジア的空間、海域アジア的空間、太平洋的空間の3つから構成される。逆に言えば、これら3つの地域空間が接合し、あるいは重畳する地域が、東アジア世界なのである。本研究はまず、この複合的な地域空間の歴史的構造を解明することを目的とした。

以上のような基本認識に立って、本研究は、以下のような四つの視点を組み合わせて、「広義の東アジア」地域の歴史的構造とその変容を考察した；

- I 「中央アジア的空間としての東アジア」(佐藤貴保担当) 中央アジア学
- II 「海域アジア的空間としての東アジア」(桃木至朗担当) 海域アジア史
- III 「アジア・太平洋的空間としての東アジア」(秋田茂担当) グローバルヒストリー
- IV 「近代世界の中の東アジア」(竹中亨担当) ヨーロッパ＝東アジア交流史

本研究は、それぞれの研究領域における研究ネットワークと蓄積をつなぎ合せて、新たに「広義の東アジア」地域における地域統合の可能性を、歴史学の視点から考察する試みである。もとより、こうした研究は単年度のみで終了することは不可能であるが、本研究は、今後の本格的な大規模共同研究を展開するうえで、不可欠な準備作業、条件整備と位置づけている。

### 2. 研究プロジェクト実施状況の概要

共同研究は、通常は以下にあげる(1)中央アジア学フォーラム(上記の I を担当)、(2)海域アジア史研究会(上記の II を担当)、(3)グローバルヒストリー研究会(上記の III,IV を担当)、三つの研究グループを中心に、研究会の相互乗り入れを展開した。同時に、そうした日常の研究活動を統合するために、我々がそれぞれの分野で構築してきた国際的な研究ネットワークを接合することにも力を注ぎ、グローバルヒストリー研究と「広義の東アジア世界」を論題にした、以下に述べる三回の国際シンポジウムを開催した。

すなわち、従来から桃木が交流を進めてきたシンガポール国立大学のアジア研究所(Asian Research

Institute : ARI)、歴史学部と共同で、2007年5月22日にARIにおいて「アジアと世界史：国民国家史を超えて」*A Roundtable on Asian and World History: "Beyond National History"*と題するワークショップを開催した。次いで、北海道大学スラブ研究センターと共同で、ロシア帝国と中央アジア・極東・東アジア諸地域との関係性を多角的に論じる国際シンポジウム「ロシア帝国論再考」を、2007年12月9日に大阪で開催した。スラブ研の助力により、6名の外国人研究者と、英語・ロシア語で、帝国支配とアイデンティティの形成・変容の問題、帝国権力とイスラム教・仏教・儒教など宗教との関連性、それが現代世界にまでひきずっている遺産・影響の問題を論じた。

グローバルヒストリー概念を活用することで、東アジアの地域統合を長期の歴史的射程から、世界全体の文脈に位置づけることが可能になる。グローバルヒストリーの構築には、経済史を中核にした研究が当面不可欠であること、グローバル経済史を考察するためには、輸出入を通じた主要産品(モノ)の移動と、それに関わる情報の役割を再考することで、関係性を重視したグローバルヒストリーの具体像を描くことが必要であると考え、最後に総括的討論のために、2007年12月14-16日に三日間の国際ワークショップ *Cross-regional Chains in Global History: Europe-Asia Interface through Commodity and Information Flows* を、阪大中ノ島センターで開催した。

### 3. 研究成果

#### 3.1 グローバルヒストリーの展開：「大分岐」論争と東アジア関係史

まず、グローバルなレベルでの新たな「グローバルヒストリー」研究の展開に着目した。グローバルヒストリー研究では、従来の一国史の枠組みを超えて、ユーラシア大陸や南北アメリカなどの大陸規模、あるいは東アジア・海域アジアなど広域の地域を考察の単位とする。グローバルヒストリーでは、(1)古代から現代までの諸文明や地域世界の興亡、(2)明・清時代の中華帝国、ムガル帝国、オスマン帝国などの近世アジアの世界帝国やヨーロッパ諸国の海洋帝国など、帝国支配をめぐる諸問題<sup>1</sup>、(3)華僑や印僑(インド人移民)などのアジア商人のネットワークや、奴隷貿易・契約移民労働者・クーリーなどの移民・労働力移動(diasporas)の問題などの、地域横断的(trans-regional)な諸問題<sup>2</sup>、さらに、(4)ヨーロッパの新大陸への海外膨張にともなう植生・生態系・環境の変容など、生態学(ecology)・環境史(environmental history)に関する諸問題、(5)近現代の国際政治経済秩序の形成と変容などが、その主要な研究課題として注目されている。これらのグローバルヒストリー研究に共通するのは、従来の一国史的な歴史研究の枠組みを相対化すること、国民国家・国民経済に代わる広域の地域や世界システム・国際秩序などの新たな分析の枠組みを模索することである。

グローバルヒストリー研究で最も注目されている議論として、カリフォルニア大学のポメランツが提唱する「大分岐」(The Great Divergence)論がある。ポメランツは、西ヨーロッパと東アジアの比較地域経済史を提唱し、アメリカ合衆国を含む世界中の学界で話題になり、新しいグローバルヒストリーとして大きな「大分岐論争」を巻き起こした<sup>3</sup>。彼によれば、1750年頃まで、世界の中核地域(core regions)であった中国の揚子江流域、日本(畿内・関東)、西ヨーロッパの経済は、平均寿命・一人当たり綿布消費量・識字率など主要な点で、発展の程度はほぼ同じであった。そこでは、ともに「スミスの成長」(商業的農業とプロト工業に支えられた市場経済の発展)が見られた。しかし、それら中核地域は、18世紀半ばまでに人口増加に対する

土地の制約(マルサスの罠)に直面して、森林の枯渇や土壌浸食の進行によって食糧・繊維原料・燃料・建築資材など土地集約的な産物が不足する事態に陥った。西ヨーロッパは、この世界経済の中核地域に生じた全般的な危機を、消費地に近接して存在した炭坑地帯からの石炭の利用と、大西洋をはさんだ新大陸との貿易の拡張という幸運な二つの環境上の「偶然的要因」によって克服することができた。

以上が、ポメラantzが唱える近世西欧と東アジアの比較地域経済史である。この研究の特徴として、(1)イングランドとヨーロッパ大陸の低地地方やフランスを含む「西ヨーロッパ地域」と、東アジアの中国・揚子江デルタ地域、さらに日本の畿内・関東地域を相互比較の単位とすること、(2)世界経済の中核諸地域における同時並行的な「スミスの成長」の展開、(3)偶然的要因による西ヨーロッパと東アジアにおける経済発展径路の分岐、以上の三点を指摘できる。特に、比較の単位が「広域の地域」(mega-region)である点に注目しておきたい。

ポメラantzの議論は、ユーラシア大陸規模での生活水準の地域間比較研究を導き出した。アジア経済史・中国経済史研究の急速な進展とポメラantzやビン・ウオンの双方向的比較研究(bilateral comparison)の展開により、18世紀—19世紀清朝・中国、近世・近代の西欧(イングランド・オランダ)、江戸時代の日本(畿内と関東)における(都市部の建築職人層の)実質賃金水準を、多地域間で「生存水準倍率」(welfare ratio)という新しい指標を用いて比較することが可能になった<sup>4</sup>。斎藤修は、さらにその議論に日本に関する独自の考察を加えて発展させている。ボブ・アレンやファン・ザンデンら西欧の研究者は、依然として近世西欧の生活水準の方が東アジアよりも高かったと主張するが、斎藤修らアジアの研究者たちは、近世東アジアの独自性である小農経済、副業収入、労働日数の多さを加味した「家計の可処分所得」レベルでは、両者の間で顕著な差は見出せないと結論している<sup>5</sup>。今後の論争は、もう一つの中核地域と想定される南アジアの事例をまじえてさらなる展開が予想される。比較研究は、今やイングランド内部やヨーロッパ大陸諸都市間の相互比較を超えて、ユーラシア大陸規模に広がっている。そこでは、近世日本(江戸時代)の生活水準の高さが改めて注目されており、日本史を組み込んだグローバルヒストリーの必要性が問われている。

こうした研究動向をふまえた上で、阪大でのグローバルヒストリー研究では、二つのキイ概念を重視している。「比較」と「関係性」がそれである。国家の枠組みを超えたトランスナショナルな歴史、広域の地域史・世界史を考えようとすると、必然的に比較と関係性を考えざるをえなくなる。わが国の学界でも、いわゆる「戦後歴史学」、特に封建制の解体や資本主義体制への移行、工業化の展開を論じた比較経済史学は比較史研究の典型であろう。だが、ポメラantzの「大分岐論争」でも見られるように、比較の視点が強調されると、たとえ比較のユニットを拡大したとしても、静態的な研究に陥りがちで、諸地域間のダイナミックな関係・連鎖を含めた動態的分析が欠如する危険がある。

そこで、阪大の研究プロジェクトで強調しているのは、比較よりも「関係性」(relationship, linkage, connection)の観点である。この点で阪大を含む関西地域は、角山榮や川北稔らによる優れた「関係史研究」の蓄積を有している。世界資本主義論・世界システム論の枠組みを活用した社会経済史研究、茶(角山榮)・砂糖(川北稔)・煙草(和田光弘)などのモノに着目した都市生活社会史研究がそれである<sup>6</sup>。同時代の世界諸地域での出来事を、相互につなぎ合わせて関係づけ、一体化していく世界のなかでの諸地域の位置と役割を再考し、いわば「輪切りの世界史」像を考えていく関係史研究では、つなぎと関係を描くう

えで、ある程度の実証性が必要になる。阪大では、当面、近世以降の世界経済＝近代世界システムの形成・発展・変容の歴史的過程を関係史的視点から考察することを通じて、政治経済史の側面からグローバルヒストリー研究を構築することを目指している。

この共同研究プロジェクトでは、特に2007年12月の国際ワークショップにおいて、検討の時期を近世の17世紀から21世紀現代にいたる4世紀間に設定し、「モノと情報の相互連関」を通じたグローバルヒストリー構築と東アジアの位置付けを議論した。具体的な検討課題として、以下の三点を取り上げた；①グローバルヒストリーにおける諸地域間を結びつける多様な chains の考察；②近世(18世紀世界)において、アジア世界(東洋)と欧米(西洋)の間で、モノと情報の流れにいかなる相違と共通性があり、それが近代西欧とアジア世界の間で「大分岐」(great divergence)を引き起こすことに寄与したのか否か；③モノと情報が移動する制度的枠組みとして、国家が果たした役割に着目する。特に、近代世界システム形成期の諸帝国、システムが確立されて以降のヘゲモニー国家が、モノと情報の動きに関していかなる役割を果たしたのか比較検討を行う。

特にワークショップでは、近世(長期の18世紀)と現代との比較を重視した。というのも、最近のアジア経済史・広域比較地域経済史によって明らかになった、近世の世界主要地域の経済発展に関する研究成果を批判的に検討し、同時に、1970年代以降の「広義の東アジア」地域の急速な経済発展＝「東アジアの奇跡」(East Asian miracle)の歴史的意義を考察すること、さらに、その相互比較と連関性を検討するためである。本研究では、ポメラントの問題提起を受けて、近代西欧とアジア世界の間での経済発展経路の分岐・相違と、情報の流れ・質(透明性・公開性)との関係を問うた。アジアとヨーロッパにおける経済情報の質、伝達経路の相違に着目することで、「大分岐」の原因の一端を明らかにすることができた。モノの移動(商品の輸出入)を通じた地域間関係の形成と発展については、従来、近代世界システム論による「世界経済」の拡張、ステープル(主要輸出産品)理論との関連で論じられてきた。本研究は、ポメラントの同僚であるS.トピックがその編著 *From Silver to Cocaine: Latin American Commodity Chains and the Building of the World Economy, 1500–2000* (Durham and London, 2006)で提唱した“Commodity Chains”概念に着目し、モノの連鎖を通じて、地域経済と世界経済の接合、商品情報の役割を再考した。

その結果、「長期の18世紀」と20–21世紀の現代世界に焦点を絞ることにより、欧米世界とアジア世界との比較を行う際のアジア世界の相対的独自性が改めて明らかになった。「長期の18世紀」は、近年のヨーロッパ史研究において注目されているだけでなく、海域アジア史、南アジア史でも現地社会の自立性が改めて強調されて従来の定説(ウエスタン・インパクト)の見直しと論争が展開されている(例えば、P.J.Marshall(ed.), *The Eighteenth Century in Indian History: Evolution or Revolution?* (New Delhi, 2003); Seema Alavi(ed.), *The Eighteenth Century in India: Debates in Indian History and Society* (New Delhi, 2002)などを参照)。前述のポメラント論争は、中華帝国の経済発展の見直し、東アジアと近世西欧の比較地域経済史研究を通じた、アジア世界の相対的優位性を示唆している。他方で、現代における「東アジアの奇跡」は、東アジア世界の経済発展経路の特異性と普遍性を問うことを要請している。本研究では、両時期のアジア世界と西欧を対比することで、従来の西洋中心的な世界史像を相対化することが可能になることを確認した。

### 3.2 交錯する地域世界像

1999年に決定された高校世界史Bの現行学習指導要領は、世界、とくに前近代のそれを複数の「文化圏」に分ける従来の方法にかえて、東南アジア、中央アジア(中央ユーラシア)など単一の文化圏ないし文明圏とはいえないまともにも含めた「地域世界」区分を採用した。その背景には、地域区分の基準の多様化や中心からばかり見るのではなく中心と周辺を往復する動的な視座の導入といった方法論の進化と、各地域世界ないし広域の地域(mega-region)、それらの中心となった帝国などの研究における大きな進展があった。

農業生態や海域・貿易・港市論など東南アジア地域研究<sup>7</sup>が脚光を浴びたのと同じ1980年代以後、ようやく毛沢東の呪縛から解き放たれた中国史も、劇的な変身を遂げた<sup>8</sup>。それは、中国(台湾・香港を含む)の学界、前節のグローバルヒストリー研究に大きな影響を与えた英語圏の学界、それに日本の学界の三者が牽引車となって実現された知の変革であった。日本の学界では、後述する地域社会論や小農社会論、そして渡辺信一郎、足立啓二らの専制国家論が生まれただけではなく、世界のグローバルヒストリーに影響をあたえた濱下武志の朝貢システム論<sup>9</sup>を皮切りに、檀上寛の海禁論<sup>10</sup>、岸本美緒の貿易や物価の研究<sup>11</sup>、黒田明伸の貨幣と市場の理論<sup>12</sup>などなど、近世以降の東アジア世界についての斬新な研究が続出し、一部は日本史や満洲史、東南アジア史など周辺地域の研究とも呼応しながら、「自給的な封建社会・国家が19世紀のウエスタンインパクトで突然激変する」という従来の東アジア史像を根本的に覆した。

同じころ、西方では西アジア・北アフリカや中央アジアの「イスラーム世界<sup>13</sup>」に関する研究が着々と進み、オリエンタリズムに縛られたそれまでの歴史像や歴史用語を大幅に書き換えた。南アジアでも非アリア系住民や海上貿易史への着目を含みつつ、地域世界像の刷新が進んだ。

やや遅れて90年代には、過去の学問になりかかっていたシルクロードや遊牧騎馬民族の研究が、杉山正明・森安孝夫らの活躍によって、中央ユーラシア史<sup>14</sup>として蘇った。それは、かつての「東西交渉史」に欠けていた遊牧国家やオアシス国家の構造的な理解において、長足の進歩を見せた。たとえばモンゴル帝国を構成する諸ウルス(クニ)間およびウルス内部の多元構造が、多言語史料と文書学や金石学や考古学の最新の方法論を用いて解明され、「戦争が強いだけの野蛮人」「きびしい身分差別」などのイメージは粉碎された。モンゴル帝国時代のアフロ・ユーラシア全域を巻き込んだ広域交流は、近世のユーラシアを覆った「モンゴル後継国家群」の発展・成熟とともに、「近代の序曲」と見なされる<sup>15</sup>。中央ユーラシア史は一方、阪大の森安孝夫らの唐王朝研究に見られるように、「漢民族の中国が二千年続いた」というステレオタイプの中華帝国像に対して、北方・西方民族の参入による「大きな中華」とそれを拒んだ「小さな中華」が交互に現れたというダイナミックな像を対置した。

2007年3月の第30回中央アジア学フォーラムにおいて、シルクロード貿易の進展によって中国前近代の文化が西方のペルシアなどの影響を強く受けていることを示す研究紹介が文献・絵画・考古の新資料を基に数多く行われた。本研究の分担者である佐藤貴保も、中国北西部の甘粛省、かつてのシルクロード交通の要衝の街だった張掖市に現存している12世紀後半に彫られた漢文とチベット文のバイリンガルの石碑の文章を再検討し、当時この地域を支配していた西夏王国政府がシルクロード交通の安全保障に重大な関心を持っていたこと、従来漢語と西夏語が主に使われていたと考えられていたこの地域で、チベット語も公用語として用いられていたことを指摘し、シルクロードの文化交流が東西の交流だけでなく、南のチベットと

北のシルクロードオアシス地帯との間での南北の交流も存在していたことを示した。

ブローデルの『地中海世界』の影響<sup>16</sup>、マルクス主義の問い直しや現代資本主義における主導権を商業・流通・金融・情報などが握る状況、その他多くの要因が複合して、80年代以後、世界中で貿易史や海域世界の研究が活発化した<sup>17</sup>。アジアの広域史でも、もともと交易史研究が盛んだった東南アジアでアンソニー・リードが「交易の時代」(1450-1680年)を中心に海域世界の全体史を構築しただけでなく<sup>18</sup>、西アジアからインド洋を見る家島彦一<sup>19</sup>、インド中心にインド洋を扱うK.N.チャウドリ<sup>20</sup>などのインド洋世界史もつぎつぎ世に問われた。東アジアでも、中国の改革開放政策、「日本史」を相対化する日本の学界の努力、韓国・台湾などの「東アジアの奇跡」といった要因が重なり、海域史ブームが到来した。これらの海域世界は、海禁が強い規定性を帯びた明代前期の東アジア世界のような例外はあるものの、特定の中心一周辺構造で全体を理解することは難しい場合が多く、複数の「世界」や「ネットワーク」のゆるやかな重なり合いが、近代世界システムの波及以前の常態であった。

阪大を本拠とする「海域アジア史研究会」は、東・東南アジア海域—上記のように統合度が比較的高い—に重点を置きながらも、複数のまとまりの競合・重層・連鎖などの場としての「海域アジア史」を模索している。本研究プロジェクトにおいても、日本を含む東北アジア地域、東南アジア地域に関して、広域の「海域」概念を適用して、「広義の東アジア世界」における相互連関、交易・貿易、移民等を通じた、モノ・ヒト・カネ・情報の流れを実証的に解明した。2007年5月にシンガポール国立大学と共催した国際会議では、日本側から4名、シンガポール側から4名が、世界史・グローバルヒストリー研究をめぐる研究動向、その到達点と将来の課題を整理した。特に、グローバルヒストリーと海域史の接合に関して、過去二回共同で行ったワークショップの成果を英語で出版する件について議論を重ねた。東南アジアを世界史と接合する際に、地域的な貿易ネットワークと世界システム、帝国・ヘゲモニー国家との関連性を考慮することが必要であることを確認した。

21世紀に入り、最新の広域地域(mega-region)研究として頭角を現しつつあるのが、スラブ・ユーラシア学である。「ロシア文学」「社会主義研究」など他の地域世界と違った「知的資産」をもつスラブ・ユーラシア研究は、自己を取り巻く東アジアないし東北アジア史、「日本史」、中央アジア史やイスラーム世界史、ヨーロッパ史などの学界と斬り結びながら、多元的なスラブ・ユーラシア地域の像を描きつつある<sup>21</sup>。そこでのキー概念は、ユーラシア大陸規模で歴史的に展開した旧ロシア・ソ連帝国を構成したスラブ圏東欧・中央アジア・ロシア極東の「中域圏」というメガ・リージョンと、その周辺諸地域との交流＝「跨境史」の構築である。東南アジア地域研究がかつて、「生態」を土台に海域論・貿易論や国家・社会の理論を組み立て、多分野に新鮮な影響を与えたのに対し、文学など人文学的な要素を軸に地域を考えるスラブ・ユーラシア学の姿勢—それはもちろん、19世紀的な学への退行では決してない—は、地域研究の新しい方向性として注目される。本研究では、2007年12月に北大スラブ研と共同で国際シンポジウムを開催し、旧ロシア帝国支配とアイデンティティの形成・変容の問題、帝国権力とイスラーム教・仏教・儒教など宗教との関連性、それが現代世界にまでひきずっている遺産・影響の問題を論じた。

以上述べてきた広域地域研究は現在、スラブ・ユーラシア学が自覚的に取り組むように、他の地域世界との関係、地域間比較という共通の課題に直面している。西洋中心史観その他の古い歴史像を批判して、自地域の独自性・先進性を解明・主張するだけでは、もはや「批判している古い史観の裏返しとしての自

地域中心史観」にしかならない。「東南アジア地域研究」が圧倒的な華人経済など東アジアとの関係の理解に苦慮し、「イスラーム世界」という視座が内部から批判され、中央アジア史の理解をめぐってイスラーム化以前のシルクロードの繁栄を重視する視点と現在の視点からイスラーム化以後を重んじる視点が対立する(シルクロード論争)など、中央ユーラシア史と伝統的中国学の対立以外にも、あちこちで論争がおこっているのは、広域地域研究の発展にともなう必然的な現象である。その論点、地域区分の基準の整理や、相互の見解のすりあわせが急務である<sup>22</sup>。

#### 4. 研究成果の公表

本研究プロジェクトの中核を構成した海域アジア史研究会は、定例研究会を開催するとともに、研究成果の社会への還元、情報発信として日本では初めての試みとして、桃木至朗が編者となって岩波書店より『海域アジア史研究入門』(2008年3月26日発売)を刊行した。同書は世界でも類書のない初めての試みとして、特筆に価する。現在、英語版の出版を企画している。以下、同書の構成と目次を掲げておく;

##### ◆『海域アジア史研究入門』目次(岩波書店、2008年3月刊行)

総説:海域アジア史のポテンシャル 桃木至朗・山内晋次・藤田加代子・蓮田隆志

##### 第一部:通時的パースペクティブ

##### I) 中世<9~14世紀>

(第1章)中国人の海上進出と海上帝国としての中国 榎本渉

(第2章)モンゴル帝国と海域アジア 四日市康博

(第3章)宋元代の南海 深見純生

(第4章)日本列島と海域世界 山内晋次

##### II) 近世前期<14~17世紀初頭>

(第5章)明朝の国際システムと海域世界 岡本弘道

(第6章)琉球王国の形成と展開 上里隆史

(第7章)日明関係 伊藤幸司

(第8章)日朝関係 関周一

(第9章)倭寇 橋本雄・米谷均

(第10章)「交易の時代」の東・東南アジア 中島楽章・桃木至朗

(第11章)ヨーロッパ勢力の台頭と日本人のアジア進出 岡美穂子

##### III) 近世後期<17世紀中葉~19世紀初頭>

(第12章)経済史からみた近世後期の海域アジア 藤田加代子

(第13章)近世後期東アジアの通交管理と国際秩序 渡辺美季・杉山清彦

(第14章)蝦夷地と琉球 谷本晃久・深澤秋人

(第15章)東南アジアの「プロト国民国家」形成 蓮田隆志

(第16章)18世紀の東南アジアと世界経済 太田淳

(第17章)近世から近代へ ——近世後期の世界システム 秋田茂

##### 第二部:各論

(第 18 章)宋元時代における互市貿易と国家-海上・陸上の比較 佐藤貴保・向正樹

(第 19 章)港市社会論(長崎、広州) 川口洋平・村尾進

(第 20 章)貿易陶磁 坂井隆

(第 21 章)海産物交易 ——「竜涎香」をめぐる—— 真栄平房昭

(第 22 章)造船技術 ——列島の木造船、終焉期のけしき 出口晶子

(第 23 章)航海信仰 ——媽祖を中心とする東北アジアの神々 藤田明良

(第 24 章)漂流・漂流記・海難 劉序楓

(第 25 章)海域アジア史のための東アジア文献史料 渡辺佳成・飯岡直子

グローバルヒストリー関連の研究実績については、URL <http://www.globalhistoryonline.com/JP/index> に掲載している Global History Discussion & Working Paper を参照されたい。

## 5. 今後の課題と方向性

以上が 2007 年の 1 年間にわたる研究活動の成果である。

個別の研究会の成果については、今後、論文や Working Papers としてさらに出版していきたい。2007 年 12 月の総括国際ワークショップの成果は、Shigeru Akita (ed.), *Creating Global History from Asian Perspectives: Proceedings of Global History Workshop, 14<sup>th</sup>-16<sup>th</sup> December 2007 in Osaka: Cross-regional Chains in Global History: Europe-Asia Interface through Commodity and Information Flows* (Osaka University, March 2008) として暫定的に刊行した。最終的に英文の研究論集として、欧米の出版社から刊行するつもりで編集作業を進めている。

今回の共同研究プロジェクトは、今後 4 年計画で本格的に展開していくグローバルヒストリーの大規模共同研究の基盤を構築することに最大の目的があった。大阪大学は、2007 年 10 月に旧大阪外国語大学と合併して、新生・大阪大学となった。われわれのプロジェクトは、大阪外大が蓄積してきた東アジア地域研究の成果と、阪大の文系部門のディシプリンの成果をつなぎ合わせて、新たな地域研究を展開していくモデルケースとなるであろう。

本研究の支援により構築することができた内外における研究ネットワークを基盤として、幸いなことに 2008 年度から新たな共同研究「グローバルヒストリー研究の新展開と近現代世界史像の再考」(日本学術振興会・科学研究費・基盤研究 A:課題番号 20242013;代表 秋田茂)を立ち上げることができた。その新しい共同研究では、JFEプロジェクトで浮かび上がった論点、すなわち、現代の東アジア地域統合を考察する上で、近世「長期の 18 世紀」の東アジア世界と欧米諸地域との関係性を再考する必要があること、同時に、20 世紀後半の「広義の東アジア」地域の経済発展と「長期の 18 世紀」を比較検討する必要性を集中的に議論している。それを通じて、最終的には、19 世紀世界の再考をアジアの視点から行うことになるであろう。

もとより、冒頭でも言及したように、この大きな検討課題を新たな視点から考えていくためには、日本国内での共同研究だけでなく、国際的な共同研究が不可欠である。JFEプロジェクトを通じて確立・補強できたシンガポール国立大学、中国・南開大学、ロンドン大学LSE、カリフォルニア大学アーバイン校との国際協力、国内では北海道大学スラブ研究センターとの緊密な協力関係は、大阪大学の世界史講座にとって不



可欠の「公共財」となった。今後はこの研究ネットワークを最大限活用して、東アジア地域統合に関する歴史的研究をグローバルな観点からさらに発展させていきたい。

その具体的な第一歩として、アジア諸国における世界史・グローバルヒストリーの教育・研究を比較し、アジアの視点から新たな世界史像の構築に貢献するために、アジアを舞台に世界史を考える人々が相互に協力しあうことを主要な目的として、新たな国際学会「アジア世界史学会 **Asian Association of World Historians: AAWH**」<sup>23</sup>を立ち上げる準備を始めた。事務局は大阪大学世界史講座に置かれることになり、事務局長には秋田茂が就任した。また、暫定的な評議会として5名の評議員が選ばれ、内一名が暫定会長となることになり、法政大学の南塚信吾が選出された。2009年の5月29日(金)―31日(日)に大阪大学中ノ島センターで設立総会と第一回国際会議を開く予定で、事務局において鋭意準備を進めている。共通テーマとして、「世界史研究と世界史教育」*World History Studies and World History Education*を掲げ、第一日目の2009年5月29日には、日本とアジアを代表する3名の世界史家(木畑洋一、小谷汪之、アンソニー・リードの三氏)による基調講演を、最終日の5月31日には、世界史教育の現状と展望をめぐる比較国際シンポジウム *Educations of World History: A Comparative Perspective*を企画している。基調講演者としてリード氏をお招きできるのも、本JFEプロジェクトの経費によりシンガポール国立大学アジア研究所(ARI)との国際ワークショップを開催できたおかげである。

アジア太平洋地域に基盤を置くこの新たな国際学会の発足により、広域の地域(mega-region)に着目したアジア発の新しい世界史、グローバルヒストリー研究の構築もさらに加速されるであろう。

[本研究は、JFE21世紀財団・2006年度アジア歴史研究助成の成果である。諸般の事情により、研究成果のとりまとめが遅れたが、御理解と御支援をいただいた財団に対して心よりお礼申し上げたい。]

---

<sup>1</sup> 山室信一編『帝国の研究 原理・類型・関係』(名古屋大学出版会、2003年)に論点がまとめられている。

<sup>2</sup> Patrick Manning, *Navigating World history: Historians Create a Global Past* (London and New York: Palgrave-Macmillan, 2003), chapter 9, p.176.

<sup>3</sup> Kenneth Pomeranz, *The Great Divergence: Europe, China, and the Making of the Modern World Economy* (Princeton University Press, 2000); 杉原薫「比較史のなかの東アジア 16-19世紀」『日本歴史学協会年報』第16号(2001年); 脇村孝平「グローバル・ヒストリーと「環境」」社会経済史学会編『社会経済史学会創立70周年記念 社会経済史学の課題と展望』有斐閣(2004年)。

<sup>4</sup> R.C. Allen, T. Bengtsson and M. Dribe (eds.), *Living Standards in the Past: New Perspectives on Well-Being in Asia and Europe* (Oxford University Press, 2005).

<sup>5</sup> J.P.バッシーノ・馬徳武・斎藤修「実質賃金の歴史的水準比較―中国・日本・南欧、1700-1920年」『経済研究』56-4(2005年); 斎藤修『比較経済発展論―歴史的アプローチ』(岩波書店、2008年)。

<sup>6</sup> 角山榮『茶の世界史―緑茶の文化と紅茶の文化』(中公新書、1980年); 川北稔『砂糖の世界史』(岩波ジュニア新書、1996年); 和田光弘『タバコが語る世界史』(山川出版社・世界史リブレット90、2004年)。

- 
- <sup>7</sup> 歴史研究の成果は『岩波講座東南アジア史』(全9巻+別巻、2001~03年)にまとめられている。
- <sup>8</sup> 大きな見取り図は時代ごとに編まれた『中国史学の基本問題』シリーズ(汲古書院、全4巻、1996~2001年)、それに礪波・岸本・杉山編『中国歴史研究入門』(名古屋大学出版会、2006年)などを見よ。
- <sup>9</sup> 濱下武志『近代中国の国際的契機—朝貢貿易システムと近代アジア』(東京大学出版会、1990年); 濱下武志『朝貢システムと近代アジア』(岩波書店、1997年)。
- <sup>10</sup> 檀上寛「明初の海禁と朝貢—明朝専制支配の理解に寄せて」森正夫他編『明清時代史の基本問題』(汲古書院、1997年); 檀上寛『永楽帝—中華「世界システム」への夢』(講談社、1997年)ほか。
- <sup>11</sup> 岸本美緒『清代中国の物価と経済変動』(研文出版、1997年); 岸本美緒『東アジアの「近世」』(山川出版社・世界史リブレット13、1998年)。
- <sup>12</sup> 黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』(名古屋大学出版会、1994年); 黒田明伸『貨幣システムの世界史—(非対称性)をよむ』(岩波書店、2003年)。
- <sup>13</sup> 日本での「イスラーム世界」の研究は、「イスラームの都市性」「イスラーム地域研究」などの大規模共同研究も通じながら大きな前進をとげたが、羽田正『イスラーム世界の創造』(東京大学出版会、2005年)のように、イスラーム世界というくり方に批判的な見解も出現している。
- <sup>14</sup> 杉山の概説書は『クビライの挑戦—モンゴル海上帝国への道』(朝日新聞社、1995年)、『遊牧民から見た世界史—民族も国境もこえて』(日本経済新聞社)ほか多数。一方の主役である森安孝夫の研究は『興亡の世界史5—シルクロードと唐帝国』(講談社、2007年)参照。
- <sup>15</sup> 英語圏では Janet Abu-Lughod, *Before European Hegemony: The World System A.D. 1250–1350* (Oxford University Press, 1989). [アブー＝ルゴド, ジャネット・L. (佐藤・ス波・高山・三浦訳)『ヨーロッパ覇権以前—もうひとつの世界システム』上下、岩波書店、2001年]が唱えた「13世紀世界システム」が注目された。また、帝国のグローバルヒストリー研究 John Darwin, *After Tamerlane: The Rise and Fall of Global Empires, 1400–2000* (London and New York: Penguin Books, 2007)では、モンゴル帝国の後継としてのチムール帝国の画期性が強調されている。
- <sup>16</sup> フェルナン・ブローデル(浜名優美訳)『地中海』全5巻(藤原書店、1991–95年); 川勝平太編『海から見た歴史—ブローデル『地中海』を読む』(藤原書店、1996年)。
- <sup>17</sup> 概要および海域アジア史研究会の成果は桃木至朗ほか編『海域アジア史研究入門』(岩波書店、2008年)参照。
- <sup>18</sup> Anthony Reid, *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450–1680*, 2 vols. (New Haven: Yale University Press, 1988, 1993).
- <sup>19</sup> 家島彦一『海が創る文明—インド洋海域世界の歴史』(朝日新聞社、1993年); 家島彦一『海域から見た歴史—インド洋と地中海を結ぶ交流史』(名古屋大学出版会、2006年)。
- <sup>20</sup> K.N. Chaudhuri, *Trade and Civilization in the Indian Ocean: An Economic History from the Rise of Islam to 1750* (Cambridge University Press, 1985); K.N. Chaudhuri, *Asia Before Europe: Economy and Civilization of the Indian Ocean from the Rise of Islam to 1750* (Cambridge University Press, 1990).
- <sup>21</sup> 北海道大学スラブ研究センター監修『講座スラブ・ユーラシア学』全3巻(講談社、2008年); 左近幸村編『近代東北アジアの誕生: 跨境史への試み』(スラブ・ユーラシア叢書4) (北海道大学出版会、2008年)。
- <sup>22</sup> 科学研究費報告書『近代世界システム以前の諸地域システムと広域ネットワーク』(代表桃木至朗、大阪大学、2007年)は、その一部について論点整理をはかったものである。
- <sup>23</sup> <http://www.let.osaka-u.ac.jp/seiyousi/AAWH/index>